奈良教育大学教育研究支援機構

News Letter

2022.3 第 11 号

Educational and Academic Support Organization

教育の状況と教育研究支援機構の活動

教育研究支援機構長　伊藤直治

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大を受け、社会が大きく変容する中、教育研究支援機構を構成する各センター・図書館は、教育研究活動を止めず継続するために、ICT 等を活用し、オンラインでの活動をこれまで以上に積極的に取り入れてきました。本ニュースレターではそのような活動も含め、各センター・図書館の令和 3 年度における活動全般をご報告いたします。

令和 3 年度の教育に関わる状況を振り返ると、まず小学校の学級編制標準が 40 人から 35 人へと引き下げられました。このことは長らく議論になっていましたが、コロナ禍ということも影響したようです。また、中学校で新しい学習指導要領が全面実施となりました。小学校では、令和 2 年度から全面実施されています。また、令和 3 年度は GIGA スクール元年とも言われています（GIGA は、Global and Innovation Gateway for All の略です）。GIGA スクール構想とは、(1) 1 人 1 台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現すること、および (2) これまでの我が国の教育実践と最先端の ICT のベストミックスを図ることにより、教師・児童生徒の力を最大限に引き出すこととされています。この構想では、学校のハードウェア環境を令和元年から 5 年かけて整備する計画でしたが、コロナ禍においてオンラインでの活動の必要性が高まり、計画を大幅に前倒しして、令和 2 年度中にほとんどの小学校・中学校で ICT 端末が導入されました。令和 3 年度は、そのような環境を利用して、令和の日本型学校教育の実現を目指すとされました。理想へ近付けていくための努力が続けられています。

令和 3 年度に次世代教員養成センターの改編が検討され、同センターの廃止と共に、 ESD・SDGs センターと情報センターが設立されることになりました。教育研究支援機構は令和 4 年度に両センターを加えて、新たなスタートを切ります。上述のような教育に関わる状況の変化に対応しつつ、これまでにも増して、奈良教育大学の教育・研究ならびに地域への貢献に資する組織として活動して参ります。

令和 4 年 2 月に衝撃的なニュースが世界中を駆け巡りました。全ての皆様のご健康とご安全を心より祈念いたします。

奈良教育大学教育研究支援機構

自然環境教育センター
- 教育研究開発部門
- 地域開放部門

理数教育研究センター
- 教育プログラム推進部門
- 先端科学教育部門

特別支援教育研究センター
- 発達支援部門
- 教育実践支援部門

国際交流留学センター

次世代教員養成センター
- 情報教育部門
- ＥＳＤ・課題探究教育部門
- 情報基盤部門

図書館（教育資料館を含む）

【図書館】

1.　図書館の取り組み

令和 3 年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、図書館は 5 月から 6 月半ばにかけて平日 17 時までの開館となるなど、従来どおりの運用とは異なる環境でしたが、蔵書の充実や図書館の利用促進を図るため様々な取り組みを行いました。

(1) 図書館ガイドの作成

図書館の学生スタッフが自身の勉強を進める上で役に立った図書館の使い方、図書の探し方、おすすめの図書などをまとめた図書館ガイドを専修ごとに作成しました。現在、幼年教育・美術教育・文化遺産教育・書道教育の 4 専修分をホームページで公開していますが、順次、追加していく予定です。

(2) 教育実習期間の日曜開館の実施

6 月と 9 月の教育実習期間において日曜開館を実施しました（3 日間）。その後、教育実習生を対象として日曜開館についてのアンケートを行ない、利用実態や要望について調査しました。調査結果をもとに、来年度も日曜開館を行う予定です。

(3) ブック展示企画

令和 3 年度より、SDGs の 17 の目標を順に展示のテーマとして取り上げる企画を開始しました。本年度は「1.貧困をなくそう」「2.飢餓をゼロに」「3.すべての人に健康と福祉を」の目標を取り上げ、展示を行いました。来年度は目標 4「質の高い教育をみんなに」から進めていきます。

ブック展示

(4) ラーニング・コモンズの活用

ラーニング・コモンズやグループ学習室に電源タップを増設し、非対面授業実施時の授業受講場所として活用できるように学習環境の整備を行ないました。ラーニング・コモンズは授業だけでなく、現職教員を対象とした夏の公開講座や教員のＦＤ研修等でも活用されました。

ラーニング・コモンズでのイベントの様子

⟨5⟩ ブックハンティングの実施

図書館に置きたい本を学生に選んでもらう「ブックハンティング」を、大阪の大型書店で 1 回、オンライン上で 1 回実施しました。いずれも参加者には大変好評であったため、来年度も新型コロナウイルス感染症の拡大状況を勘案しながら、実店舗・オンライン各 1 回を開催する予定です。

(6) 授業関連図書コーナーの整備

シラバス掲載図書と各学問分野の初学者が最初に読んでもらいたい図書を揃えた授業関連図書コーナーについて、図

書館運営委員会委員の協力のもと、今年度は数学教育・音楽教育・家庭科教育分野の図書に「初級」「中級」といったレベル付けを実施しました。該当図書にはレベルを示すシールが貼られ、一部の本の帯には教員からの推薦コメントを掲載しています。また、ブックガイド「〇〇の本棚」(「数学教育の本棚」など）を作成し、学生に配布しました。

（7）展示会の実施

図書館１階ライぶらりギャラリーにて、図書館主催の展示会「正倉院模造復元品展」を実施しました（10 月 25 日-11 月 6 日)。

また、「仮名書法演習　成果発表会」(8 月 12 日-8 月 19 日、大学院授業「仮名書法演習」)、「百人一首と阿倍仲麻呂の歌」展（9 月 3 日-9 月 17 日、大学院授業「伝統文化発信法 II」)、「CRAFT MEETS DIGITAL」展（2 月 10 日-2 月 28 日、学部授業「工芸Ⅳ」)、「仮名書法演習　成果発表会」(3 月 1 日-3 月 11 日、大学院授業「仮名書法演習Ⅱ」、学部授業「仮名書道と実用書」）といった学内の様々な展示企画にも活用されました。

「CRAFT MEETS DIGITAL」展

２．教育資料館

令和 3 年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、教育資料館は 4 月から 6 月下旬まで休館となりました。7 月からは通常開館及び感染症対策を徹底し、大学の授業利用や企画展を実施しました。また、学外の特別展に所蔵品の貸付を行い、本学の所蔵品を学外者に公開しました。

（1）WEB 展覧会の実施

活動が制限された中でも、感染症対策を徹底しながら「2021 年度　前期成果展 制作の構造」展や授業による展示実習や卒業・修了展示を行いました、一部の展示では、その成果を「第 11 回奈良教育大学博物館実習成果報告展－暮らしの中の博物館展－」、「令和 3 年度文化遺産教育専修卒業・修了展覧会」として教育資料館 HP に Web 展示としてインターネットに公開しました。

左：第 11 回奈良教育大学博物館実習成果報告展
　　－暮らしの中の博物館展－
右：令和 3 年度文化遺産教育専修卒業・修了展覧会

（2）WEB 展覧会の実施

奈良市埋蔵文化センターで開催した令和 3 年度秋季特別展のため埴輪等 16 点を特別展に本学所蔵品の貸付を行い、広く一般に公開されました。

【次世代教員養成センター】

◆ ESD・課題探究教育部門 ◆

１．教員養成カリキュラム開発領域

次世代の教員に求められる資質能力を育むために、学部カリキュラムの変更の一環としていくつかの授業が新設されたり、再編されたりしています。そのうちの目玉の一つとして、2020 年度から２回生必修の「学校フィールド演習Ⅰ（学校体験活動）」が開講されました。

本科目は、副題として「学校体験活動」という名前がつけられている通り、大学の講義室ではなく、実際の学校現場に出向き、授業観察や指導支援等を行うことを通じて、子ども理解を深めることを目的としています。同時に、教員という仕事のやりがいや面白さ、難しさについても、実体験を通じて感得することもねらっています。全国の教職課程でも、実施されているところはありますが、本学のように、全学生に必修化しているところはほとんどありません。教員養成のフラグシップ（旗艦）である教育大学の社会的使命にも鑑み、この科目を実施しています。

学校フィールド演習Ⅰは、幼稚園、小学校、中学校・高等学校の３つのクラスに分かれて実施します。授業全体と各クラスのコーディネートを、本領域の４名の教員（兼任含む）が担当します。2021 年度は、２回生 267 名、３・４回生 14 名が本科目の受講を通して、奈良市立学校や附属学校園の現場で支援活動に携わりました。

実際の活動内容は、授業の観察や支援、行事活動の補助、特別支援学級の支援、学校環境の整備、部活動指導など多岐にわたっており、受入校からは、大変熱心で意欲的に活動しているという評価をいただいています。また、この支援活動をきっかけに、引き続きスクールサポーターの活動を行う学生もいます。学校現場の空気に触れながら、大学の講義室ではなかなか得ることのできない「実践知」を、できるだけたくさん、そして多様に、身につけていってほしいと願っています。

（資料）学校フィールド演習Ⅰ　シラバス（抜粋）

目的：
学校園における授業支援、学習支援等の活動（スクールサポート活動）を通して、授業・保育場面における子どもの「姿」についての理解を具体的に深めることを目的とする。

到達目標：
１．授業・保育場面における子どもの「姿」の特徴について、具体的に説明することができる
２．子どもの「姿」の「背景」について、協議等を通じて推測することができる。
３．教師の指導（かかわり）のありようについて、子どもの「姿」と「背景」に関する考察に基づいて、説明することができる。

Cuffet：
５．子ども理解

授業計画：
第１回　実施ガイダンス
第２回　フィールド活動基礎論
第３回　授業・保育場面における子どもの姿①
第４回　授業・保育場面における子どもの姿②
第５回　授業・保育場面における子どもの姿③
第６回　フィールド活動（１）
第７回　フィールド活動（２）
第８回　フィールド活動（３）
第９回　フィールド活動（４）
第 10 回 中間報告会（ポスターセッション）
第 11 回 フィールド活動（５）
第 12 回 フィールド活動（６）
第 13 回 フィールド活動（７）
第 14 回 フィールド活動（８）
第 15 回 成果報告会

２．ＥＳＤ・教材開発領域

文部科学省情報ひろばでＥＳＤの取組を発信

文部科学省大臣官房総務課広報室では、大学・研究機関等における成果や特色ある取組の、企画展示を募集しています。ＥＳＤ・教材開発領域では、本学の ESD・SDG s の取組を発信する機会として応募したところ、見事採択され、令和 4 年 2 月 16 日～3 月 22 日の間、「奈良教育大学の SDGs と ESD の取組 －ユネスコスクールの全国拠点としての役割－」と題した展示を行いました。

まずは、奈良教育大学・近畿ＥＳＤコンソーシアムのトレードマークでもある「不東」のポスターです。この「不東」はかなりインパクトがあるようで、ユネスコスクール全国大会などでも掲示すると、ご覧になった方々から意味を問われます。「不東」は三蔵法師の言葉で、「どんな苦労があっても決して引き下がらない。」という強い決意を表す言葉です。

気候変動や生物多様性の劣化、資源の枯渇といった環境問題に加え、国際協調路線の崩壊による平和な社会の危機など、持続可能な社会とはほど遠い現在の状況ですが、持続可能な社会が実現されるまでは、一歩も引き下がらないという強い気持ちで、附属幼稚園・小学校・中学校と連携し、これからも取り組んでいきたいと思います。

その他にも奈良教育大学ユネスコクラブの活動や、ＥＳＤティーチャープログラムの全国展開、奈良ＳＤＧｓ学び旅の取組など、奈良教育大学独自のＥＳＤの取組を発信してきました。

文部科学省情報広場で奈良教育大学のＥＳＤ・ＳＤＧｓの取組を発信

ＧＣ４ＳＤへの参加

ＧＣ４ＳＤとはユネスコスクール教員養成大学間プロジェクト Teaching Together Global Citizenship for Sustainable Development の略です。日本人学生と海外の教員養成大学に通う学生がチームになって、ＥＳＤの授業を考え、それぞれの国の学校で授業実践を行うという取組です。奈良教育大学からは学部生 11 名と英語教育専修の大学院生 3 名の計 14 名が参加し、７ペアに分かれて、フィリピンとベルギーの学生とオンラインで協議しながら、授業づくりを体験しました。オールイングリッシュでの話し合いは学生にとって、決して簡単ではなかったはずですが、本取組はＥＳＤの授業力の養成だけでなく、学生の視野を広げることにもなったのではと考えています。また、ＥＳＤが日本だけでなく、世界中で取り組まれている教育活動であることが実感できたと思います。

附属中学校での授業実践の様子

コロナ禍でもやりました「集まれ！ＥＳＤ子ども広場」

今年度はずーっと新型コロナウイルスの感染拡大が収まらず、野外活動支援や学校・園でのＥＳＤ実践支援などのＥＳＤ実践ができていませんでした。毎年、近隣のユネスコスクールの児童生徒を大学に集めて、楽しくＥＳＤを体験してもらうＥＳＤ実践として「集まれ！ＥＳＤ子ども広場」に取り組んでいましたが、コロナ禍の状況の中、「集める」のはクラスター発生のリスクが高まるのでよくない、だから「こちらから出向いて行こう」と発想を転換した学生企画で、奈良市立伏見小学校５年生の全４クラスにお邪魔しました。

まずトリックアートを紹介し、見方を変えると違うものが見えてくるという体験を共有したあと、当たり前だと思っている「見方を変える」寸劇も披露しました。「レジ袋がもらえるのが当たり前だと思っていたと思うけど、マイバックにするとどう変わった？」、「学校に来るのが当たり前だったけど、コロナ禍で学校に来ることができなかったとき、どう感じた？」など、当たり前を問い直します。さらに寸劇を通して、「人は見かけによらない」「自分の見方が必ずしも正しいとは限らない」など、子ども達は楽しみながら、大切なことを学んだと思います。企画・参加してくれた学生のみなさん、ありがとう。

３．学校・地域教育支援領域

（1）スクールサポーター研修、および「こどもパートナー養成講座」の実施

本年度は、前年度と同様に、第一にコロナ感染拡大防止のため、スクールサポーター２級研修については、奈良市教育委員会の了解のもと、例年の対面式の研修に代えて、京阪奈三大学連携事業で作成したスクールサポート研修ビデオを活用し、その視聴とレポート提出による認証としました。

また第二に、スクールサポーター2 級研修を昨年度から「学校フィールド演習Ｉ」（2 回生必修）の導入部分に位置づけ実施しているため、2 級受講者は 284 名でした。

スクールサポーター１級研修会については、次の通り実施しました：講義 5，6，7（10 月 31 日（10 名受講））、講義 8（10～11 月に 5 回実施（56 名受講））、講義４：体験レポート 10 回分提出。

第三に、昨年度新型コロナ・ウイルス対応のため中止した「こどもパートナー養成講座」は、対面で 11 月 7 日に実施しました（47 名受講；16 名認証取得）。地域から来られている受講者の多くは学童保育や児童館など子ども支援に関わっておられる方々でした。

第四に、広報については、コロナ禍のもとで学生ボランティア説明会なども不開催となったため、センターホームホームページ等を活用することとなりました。

（2）不登校などの小・中学生のための居場所「ねいらく」のとりくみ（2017 年 12 月 19 日より開設）

〇概要

学内施設である寧楽館において、不登校などの小・中学生のための居場所・学習支援は次の 3 パターンで展開しています。

〇通常の居場所（火曜日 15:00~17:30）：大学生スタッフと共に、おしゃべりしたり、のんびりと絵を描いたり、ボードゲームやカードゲームで盛り上がったりしながら「心のエネルギー」を貯める時間を過ごしています。また、それぞれの子ども達の状態に合わせて個別対応も行っています。

〇昨年度 5 月から実施している Zoom によるオンライン居場所（土曜日 16:00~16:40）：外に行くのはしんどいけれど、オンラインでなら誰かとつながれるという人にピッタリな居場所です。大学生のスタッフと一緒に自分がはまっているゲームの実況をしたり、マインクラフトなどのマルチプレイをしたりして遊んでいます。大人数はしんどいなという人には、個別対応もしています。長時間ではないので、気軽に参加できます。

〇今年度 4 月から開設した「フリースペース」（金曜日 15:00~17:00）：大学生スタッフはほとんど来ていませんが、その代わりに自分の好きなことに没頭したり（例えば、1000 ピースパズルに挑戦したり）、居場所で友達になった子同士だけで遊んだりすることができます。元気が出てきて、自分のやりたいことが色々と出てきだした子ども達向けのスペースです。

以上、毎週火曜日の居場所を中心に、学生ボランティア 10 名が関わってくれています。コロナ禍の中で、密にならない分散型居場所（火曜日）を展開（14 時 30 分から 16 時、16 時から 17 時 30 分の二部制）するなど創意工夫しながら実施しています。

利用者は、定期的来訪者 10 名ほどを中心に 20 名ほど（令和４年２月末現在）となっています。地域的には、奈良市を中心に生駒市、香芝市、橿原市、京都府南部などから来てくれています。ほぼ毎週来ている子もいれば、不定期に参加する子、オンラインだけの子など、子どもの状況により多様です。

〇事業の趣旨

この事業の趣旨は、次の通りです。

- 不登校の児童・生徒など問題を抱える子ども達の居場所づくりです。
- 居場所の中で、子どもの社会性や他者とのコミュニケ

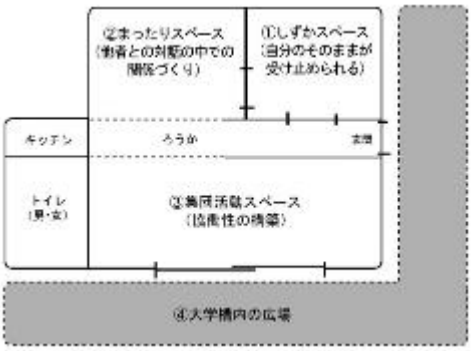
ーション力を育みながら、「心のエネルギー」を貯めることが中心です。

- 奈良県、奈良市などで活動するスクールカウンセラー２名が運営スタッフとして参加することで、子どもの心身の育ちを支援するとともに、保護者の相談にも対応しています。

- この事業は、子ども一人ひとりの心身の育ちや学びを支えるための取り組みであるとともに、子どもを通して家庭の支援にもつながるものでもあります。
- 奈良教育大学の学生がボランティアスタッフとして参加しています。そのため、今後教員として働く学生たちの教育臨床現場での臨床力を高めることにもつながります。

○居場所の空間の特徴について

居場所「ねいらく」の拠点である寧楽館には、3つのスペースがあり、それが特徴となっています。



・「しずかスペース」：静かな環境で、面談したり、学習したり、静かに過ごしたりしたい場合に利用します。

・「まったりスペース」：カーペットを敷いて、2～3 人で話をしたり遊んだり、少し学習を見てもらったり、ゆっくり活動する場合に利用します。

・「集団活動スペース」：がやがやと話をしたり、ボードゲームをしたり、イベント活動をしたりして、集団で過ごすために利用します。

このように、子どもの状況や活動の種類によってスペースを分け、子どもたちがストレスなくそれぞれの活動に集中できるように配慮しています。(学長裁量経費プロジェクト「地域における子ども・若者支援に携わる支援者等の専門性向上事業」の一環)。

（3）「ペアレント・トレーニング」セミナーの実施（全 5 回：7 月～10 月の月 1 回）

セミナーは、当事者の家族を主な対象としています。目的は、不登校やひきこもり等の生きづらさを抱える子ども・若者の自尊感情を大切にする対応をロールプレイしながら考えあい、実践につなげていくことです。オンライン参加を含め 27 名が参加しました。(学長裁量経費プロジェクト「大学と地域が連携した子ども・若者支援の居場所づくりと支援者等の専門性向上事業」の一環)

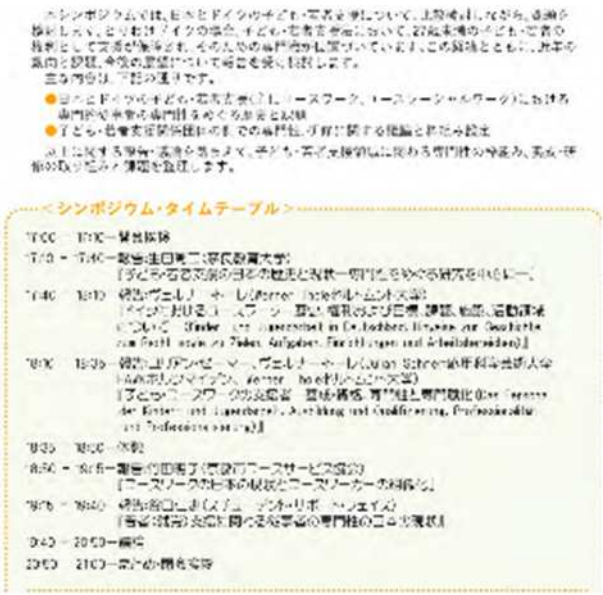
プログラムの内容

第1回	オリエンテーションと自己紹介 トレーニング（1）子どもの行動を観察してみましょう
第2回	トレーニング（2） 褒めることを習慣にするには・子どもの行動を3つのタイプに分けてみる
第3回	トレーニング（3） 上手な褒め方・聴き方・聴きタイム
第4回	トレーニング（4） 好ましくない行動への対応
第5回	トレーニング（5） 制限のゆえかた

場所：奈良教育大学　講義棟101教室
講師：生田周二（奈良教育大学 次世代教員養成センター 特任教授）
樋井恵子（奈良教育大学 次世代教員養成センター 研究員/奈良教育大学附属小学校スクールカウンセラー）
樋井裕子（奈良教育大学 次世代教員養成センター 研究員/奈良高・奈良市教育委員会スクールカウンセラー）

（4）日独シンポジウム：子ども・若者支援における専門性の構築―日本とドイ ツの「社会教育的支援」研究に基づいて―（2021 年 12 月 12 日(日)17:00- 21:00、Zoom 開催：ドイツ語、日本語の通訳付き）主催：子ども・若者支援専門職養成研究所、共催：奈良教育大学　次世代教員養成センター（学校・地域教育支援領域）

日独シンポジウムは、日本とドイツの子ども・若者支援（主にユースワーク、 ユースソーシャルワーク）における専門的従事者の専門性をめぐる歴史と課題、 ならびに関係団体の側での専門性、研修に関する議論と枠組み設定について、日本側３名、ドイツ側２名が報告しました。子ども・若者支援領域に関わる専門性の枠組み、養成・研修の取り組みと課題について検討しました。



＜シンポジウム・タイムテーブル＞

参加者は 70 名ほどで、大学等の研究者、子ども・若者支援に携わる方々、奈良教育大学などの学生・院生、一般市民の方々の参加があり、ドイツからも 5 名参加していただきました。

（5）ボランティア・サポートオフィスの活動

主には次の３つの活動があります。

- **外部の団体からの要請で学生をボランティアとして派遣**

ボランティア派遣要請がいくつかありましたが、コロナ感染拡大防止のために学生の派遣は見送りました。

- **学生スタッフによる自主活動**

学生スタッフは定期的な会合は持てませんでした。海外の子どもたちにワクチン代を寄付する目的で、ペットボトルのキャップ回収を続けています。学内や地域の協力があります。

- **東北教育復興支援**

東日本大震災後、宮城教育大学と連携して東北への支援を継続してきましたが、東日本大震災から 10 年が経過のため、区切りとして終了しました。

３．教育臨床・学校カウンセリング領域

ESD・ 課題探求部門・教育臨床・学校カウンセリング領域主催により、学生を対象とした研修会「教師に求められるカウンセリングスキルを学ぶ」を 12 月 11 日（土）に開催しました。次世代教員養成センター2 号館・多目的ホールにて、同センター特任講師の澤が講師を担当しました。

近年改訂された学習指導要領総則（文科省 2017 年告示）でも、「主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンス、個々の児童生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により、児童の発達を支援すること。」と明記されています。教師になる前の学生の間に、教師に求められるカウンセリングスキルについて知り、ロールプレイを交えて楽しく学ぶ機会を提供することにしました。

参加者は、17 名（院生 9 名、学部生 8 名）で、内容は以下のとおりです。

- 日本の学校でのカウンセリングの普及のきっかけとなった直接の出来事
- ガイダンスとカウンセリングは問題解決のための指導・援助の両輪
- 教育相談のコンセプト
- 次世代の学校指導体制の在り方について
- 学校の「抱え込み」から開かれた「連携」へ
- 学校教育相談の特質
- スクールカウンセラーの意義
- 校内での役割分担のイメージ
- 教員とスクールカウンセラーの機能の違い
- カウンセリングについて
- カウンセリングマインドについて
- カウンセリングの考え方を活かした聴き方
- 「傾聴」による受け止め
- 非言語コミュニケーション
- 子どもの話の聴き方

その他、「応答」「自己調整能力と相互調整能力」「一方向のコミュニケーションと双方向のコミュニケーション」「傾聴」「子どものＳOS を受けとめる」などをテーマにしたワークやロールプレイをして、その体験からの気づきをシェアしました。普段接点のない参加者同士でも、ワークで盛り上がり、終始和やかな雰囲気でした。感想の中にも「意見交流やロールプレイがとても楽しかった」「現場に出る不安があったが、体験的に学べたことが良かった」「実感を伴った学びとなった」「もっともっと学び続けたい」などとあり、各々が実践の場で生かしていきたいという熱意を感じました。3 時間という短い時間でしたが、教育相談の重要なポイントを理解する機会になった思います。「子どもの話をよく聴いて理解しようとすることや解決に向けて一緒に考えようとする態度が大切と気づいた」「対話する時の『双方向性』の重要性が

より強く感じられた」「カウンセリングマインドは、まず相手（子ども）を受け止めることが大事で、その受けとめを効果的にするのが傾聴すること、うなずきや相づち、目線のコントロールといった誰でも意識すれば実践できることに気づいた」「感情を理解することの難しさも感じたが、寄り添う姿勢は示すことができるので、そこはあきらめずに頑張りたい」「他の教職員との連携と協働が大切であることを改めて理解することができた」などと、それぞれの学びを深めることができました。

教育現場におけるカウンセリング理論をもとに、児童生徒とのコミュニケーションや生徒指導・教育相談での対応などを具体的なワークやロールプレイを通してより体験的に学ぶことは改めて大事と思われます。また参加者は、お互いの感じたことや経験をシェアする交流を通してより考えを深める良い機会にすることができました。

◆情報教育部門◆

情報教育部門では、教員の ICT 活用指導力向上に資することとして、教材開発や公開講座、奈良県内の自治体と連携した教員研修を実施しています。

本年度の取組の一つとして、本学学生を対象に、2 回のオンラインセミナー「情報教育セミナー：GIGA スクールの実際」を開催いたしました。昨年度、すべての小中学校に 1 人 1 台のタブレット・PC や無線 LAN 環境が整備されました。その整備状況・活用状況などはさまざまです。学生は 1 人 1 台の環境を児童生徒側としても経験していない状態で、なんか入っているらしい？という状況の人も多いのが現状です。

そこで、このセミナーでは、それぞれの自治体・学校における GIGA スクール構想における実態を学生に知ってもらうことを目的に、第 1 回（2021/11/26）は、尼崎市教育委員会・米田浩先生と度会町教育委員会・中村武弘先生、第 2 回（2021/12/24）は、川西小学校・大野黛璃先生（本学卒業生）と枚方市教育委員会・野村明央先生に、講師をお願いしました。

いずれの先生のお話においても、1. 教師として、授業を実施するプロセスの中で、いかに活用していくか、2. 学校の労働環境にどのような影響を与えたか、3. 教育委員会等からどのような支援がなされたか、などについて、各学校・自治体の様子を具体的にわかりやすくご紹介いただきました。

参加した学生からは、特に参考になった・興味深かった点として、「先生と児童、生徒がどのようにタブレットや電子黒板を使っているのかが写真や動画で示されていてとても分かりやすかったです。」、「GIGA スクールは、学校間の温度差や教員の負担については容易に想像できていたのですが、現場でどのように活用されているか、またどういった点で教員の負担を減らすことができているのかが参考になりました。」、「ロイロノートを活用した授業はどのようなものがあるのか知らないことが多かったのですが、自分の考えを書くことができたり、全員の考えを簡単に共有できるといったとても効果的なソフトであるように感じました。ICT 機器をどのように使えばよりよい授業になるか先生方の前向きな姿勢が効果的な授業につながるように感じました。」などが挙げられており、学生がより具体的なイメージを持つ機会となったと考えています。

◆情報基盤部門◆

情報基盤部門（情報館）では、基幹ネットワークや基盤システムを運用しており、安全・安心・安定した情報システムサービスの提供に努めています。

本年度は、本学の教育研究活動を展開する上で必要な情報設備を有効に保つことを目的として、継続的に情報設備の状況および改善点を把握するための自己点検評価要項を策定し、それに基づき自己点検評価を行いました。

自己点検の一環として、学生を対象とした情報システムサービス利用のアンケートを実施することで、新型コロナウィルス感染症の流行に伴う、学生の各種サービスの利用状況やニーズの把握に努めました。

アンケート結果のうち、満足度に関する回答結果からは、回答者（380 名）の 6 割が共同利用 PC 等のサービスに「満足している」と回答しており、一定のサービス提供ができていると考えられます。反面、4 割弱が「どちらともいえない」と回答しており、また特に新型コロナウィルス流行後の入学生である令和 2 年度・令和 3 年度入学生は「利用したことがない」と回答している学生も 4 割となっていました。これら

の結果については、新型コロナウィルス感染症対策に伴う大学への入構制限や授業が非対面授業となったことが影響していると考えています。

また、アンケートの自由記述からは、従来から要望のある利用時間の拡大や無線 LAN 網の拡大のほかに、非対面授業を学内で受講するために、マイクやイヤホン、カメラを利用したいとする意見をいただきました。これらに対しては情報館事務室でのマイクなどの貸出やタブレットパソコンの貸出を行うことで対応してきており、サービスの周知が十分でない点は、引き続き検討することにしています。

このように今後は自己点検評価を活用し、サービスを改善・検討していきます。

【国際交流留学センター】

本センターでは、受け入れ留学生への日本語日本文化教育とともに、国際的視野を持った教員の養成に資することを目的とした教員養成大学ならではの国際交流事業を展開しています。2021 年度は引き続き新型コロナウイルス感染拡大のため、オンラインでのプログラム提供としたり、当初計画から内容を一部変更したりすることを余儀なくされましたが、限られた人的・物的資源を最大限に活用して事業を展開することができました。活動の詳細は、以下の通りです。

（1）受け入れ留学生教育の運営

2021 年度はコロナ感染拡大の影響で受け入れ留学生数は制限されましたが、さまざまな国から前期は 25 名、後期は 33 名の留学生を受け入れました。

在籍留学生数、内訳は以下のとおりです。

前期	学部正規生 3 名、大学院正規生 11 名、学部研究生 5 名、日本語日本文化研修留学生 4 名、 交換留学生 2 名
後期	学部正規生 3 名、大学院正規生 10 名、学部研究生 7 名、大学院研究生 1 名、日本語日本文化研修留学生 3 名、交換留学生 5 名、教員研修留学生 4 名

受け入れ留学生のうち日本語日本文化研修留学生は世界各国で日本語日本文化を学んでいる大学生を対象とした文部科学省奨学金プログラム参加者です。前期 4 名、後期 3 名が渡日後 2 週間の自主隔離期間を経て本学で学びました。また本学が国際交流協定を結んでいる大学からは、前期は西安外国語大学から 2 名、後期はハイデルベルク大学から 1 名、西安外国語大学から 4 名を交換留学生として受け入れました。交換留学生はコロナ感染拡大防止のための水際対策の影響で渡日が叶いませんでしたが、本国からオンラインでプログラムに参加しました。

授業だけでなく、以下のような文化プログラムを通して日本語・日本文化の理解を深めました。

本学自然環境教育センター奈良実習園での田植え体験（令和 3 年 6 月 9 日実施）

奈良団扇づくり体験（令和 3 年 7 月 28 日実施）

日本語・日本文化研修留学生及び交換留学生オンライン最終発表会（令和 3 年 7 月 30 日～8 月 20 日実施）

日本語・日本文化研修留学生及び交換留学生の記念品授与式（令和３年８月２日開催）

灯ろうづくりワークショップ（令和４年３月３日実施、協力；技術教育専修学生（担当教員：世良啓太先生）

同期型オンラインバスツアー「石見銀山と石見神楽」（令和４年１月 14 日実施）

同期型オンライン和菓子作り体験（令和 4 年 2 月 15 日実施、大阪大学日本語日本文化教育センター教育関係共同利用拠点事業）

2022 年度４月からは、文部科学省の奨学金を得て日本の教育事情を研修するために留学している海外の現職教員（教員研修留学生）４名が、大阪日本語教育センター（ＪＡＳＳＯ）での 6 か月の日本語集中研修を終えて本学での専門教育研修を開始します。来年度は、例年のようにより多くの留学生を受け入れ、グローバルな視点での学び合いがキャンパス内でさらに活発に行われることを期待しています。

なお、留学生が少しでも安心して留学生活を送れるように、本学では新型コロナウイルス感染拡大に伴う政府や大学の対応、生活支援のための情報を英語で提供する「留学生支援サイト（https://www.nara-edu.ac.jp/international/info_ryugakuNara.html）」を開設し、留学生への支援の充実に努めています。

（2）学内における異文化交流の活性化

①留学生・日本人学生の共修機会の提供

本学の留学生対象科目の一部は日本人学生も履修可能となっており、今年度も留学生とともに日本語や日本文化について学びました。例えば、留学生向け科目「比較文化論」ではゲストスピーカーによる「ハラールとは何か」と 題した同期型オンラインの講義を全学に公開しました（令和３年６月 23 日実施）。また「日本語コミュニケーション」では「教育課程特講（担当教員：橋崎頼子先生）」と合同授業を行い、それぞれの文化に対するステレオタイプや偏見についてデ

ィスカッションしました（令和 3 年 11 月 9 日実施）。今後も留学生と日本の学生とが共に学び合える授業を提供していきます。

②学内における国際交流活発化のための取り組み

授業以外でも、国際交流の場を用意し、留学生と日本の学生とが出会える機会を多く提供しています。例えば気軽におしゃべりする場を提供する「なっきょん’s café」（定期的に開催）、「留学生と友達になろうキャンペーン」（年 1 回開催）は留学生と日本人学生の有志が中心となって実施されています。今年度はすべてオンラインでの交流となりましたが、留学生による国紹介ポスターの掲示および同期型オンラインのクイズ大会を開催するなど、対面実施が難しい中でも工夫して国際交流の活性化に努めました。また、 現在、約 30 名の学生が留学生サポーターとして活動しています。

留学生と友達になろうキャンペーン「クイズ大会」（令和 3 年 7 月 14 日開催）

なっきょん’s café「年賀状をつくろう」（同期型オンライン令和 3 年 12 月 16 日、12 月 21 日対面で実施）

さらに、コロナ禍で自由な交流が制限される中で、学生たちの国際交流を後退させないように、海外の協定校等の大学生とオンラインでつながる機会も提供しています。セントラルミシガン大学で日本語を学ぶ留学生有志と本学学生をマッチングし、日本語・英語の交換レッスンをする「言語交換プログラム」もその一つです。さらに今年度は独立行政法人国際交流基金が受託しているグリフィス大学研修の一環として本学学生がグリフィス大学で日本語を履修している学部生とオンラインで交流しました。これらオンラインでつながる試みは、今後の国際交流の新しい選択肢の一つと言えるでしょう。

また、令和 4 年 1 月 26 日には本センター主催「教師のための多様性理解シリーズ（1）ミニレクチャー“イスラームについて知ろう 日本の学校教育におけるムスリム”」をオンライン開催し、本学学生、学内外の学校教育関係者 38 名が参加しました。

（3）派遣留学の奨励と支援

日本の学生の海外留学が促進される中、新型コロナウイルス感染拡大のために 2021 年秋からの派遣留学を中断していましたが、2022 年 1 月より、国際交流協定校のアメリカ・セントラルミシガン大学へ 1 名、リヨン第三大学へ 1 名が渡り、留学生活を始めています。

なお派遣留学生に対しては、本学の支援奨学金制度に加えて、2021 年度は「海外留学支援制度短期研修・研究型（協定派遣）」が採択され、派遣留学支援となっています。

本センターでは、今後も学生支援課と連携して、派遣留学の推進に努めるとともに、協定校が提供するオンラインプログラムに関する情報収集や新たな派遣留学の可能性の模索と促進に取り組んでいきたいと思います。

（4）附属学校園や地域と連携した国際交流の推進

本学では、留学生と日本の学生とが共に、附属校園でさまざまな実践を行っています。例年は、交換留学生、大学院留学生等が本学の附属幼稚園、小学校、中学校での交流を通して多くの学びを得ていますが、今年度はそれらのほとんどが中止となりました。1 月には、日本語日本文化研修留学生と交換留学生が附属小学校 5 年生の「外国語」の授業でハイブリッド形式での交流を行う予定でしたが、コロナ感染拡大の影響で計画を変更し、留学生が制作した自国紹介動画を通じての交流となりました。ぜひ今後の交流につなげていきたいと思います。

（5）そのほか

本学の留学生受け入れに関する広報活動として、令和 3 年 10 月 15 日にはリヨン第 3 大学主催「first virtual Partners' Fair 2021」にオンラインで参加し、日本への留学希望者 7 名に対して本学の留学プログラムについて広報を行いました。

その他の活動の詳細は、国際交流留学センターのホームページ（https://www.nara-edu.ac.jp/CIES/index.html）で紹介しています。また、元本学留学生の近況報告や派遣留学生の留学体験記や帰国報告会資料も随時公開していますので、ご覧になってください。

以上のように、本センターは、本学の国際交流の基本方針の一端を担い、留学生に対して日本語日本文化教育を提供するだけでなく、留学生プログラムを核にして、学内における国際交流の環境を醸成すると共に、その活動内容や成果を学内外へ発信しています。次年度も引き続き、留学生プログラムの充実に努めるとともに、日本の学生と留学生との共修や、附属学校園等との連携につとめていきます。そして、留学生教育と連動させながら、グローバルな視点に立った教員養成に資する活動を行っていく所存です。

【特別支援教育研究センター】

1.　活動概要

特別支援教育に関わる理論と実践に関する教育研究を総合的に行い、特別支援教育を担う人材の養成に寄与するとともに、地域における児童生徒等の教育的ニーズに応じた特別支援教育推進に貢献します。主な事業内容は、①特別支援教育の内容と方法に関する理論的実践的研究、②教育学部、大学院の特別支援教育に関わる人材養成とスクールサポーター、特別支援ボランティア等の学生の研修等の実施、③発達障害もしくはその疑いのある幼児から高校生を対象とした教育相談・発達相談、④教育委員会等と連携した共同研究、⑤特別支援教育に関する公開講座および研修の実施です。スタッフには小児科医、臨床心理士、公認心理師などの専門家が在籍しています。平成 28 年度から「学校教育体系全体を視野に入れたインクルーシブ教育システムの構築と合理的配慮・ユニバーサルデザイン教育の開発」に取り組み、今後よりいっそう地域連携に基づく教育相談・発達相談の充実を目指します。

2.　令和３年度研修事業

【 公開講座 】

①　「お父さんに聞いてほしい、子どもの発達と子育ての話」

（R3.8.28（土））

講師：全　有耳　氏

（奈良教育大学教職開発講座／小児科医）

子どもの発達の道筋から発達障害の特徴、関わり方について、お母さんだけでなくお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんにも知ってほしいというコンセプトのもと、分かりやすく解説したオンライン講座を開催しました。

②　「ゲーム・ネットの世界から離れられない子どもたち」

（R4.2.26（土））

講師：吉川　徹　氏

（愛知県医療療育総合センター中央病院子どものこころ科／児童精神科医）

子どものゲーム依存やネット依存をどのように理解すればよいのか、発達障害のもつ特性とICT利用との結びつき、対応のコツ、予防のために ICT リテラシーを教えることの大切さなどについて学ぶオンライン講座を開催しました。

【 教育セミナー 】

①　「愛着障害と発達障害の理解と支援」

（R3.12.27(月)）

講師：米澤　好史　氏（和歌山大学教育学部）

奈良県内の教育関係者、本学学生を対象に、教育現場で発達障害と混同されやすい愛着障害の特徴や対応の基本姿勢、正しい見きわめ方などを学ぶ特別支援教育推進セミナー（オンライン）を開催しました。なお、本セミナーは奈良県教育委員会事務局特別支援教育推進室との共催で実施しました。

3.　令和３年度相談事業

【 保護者・子ども向けプログラム 】

①　寺子屋

学習に困難さを持つ児童を対象とした少人数（登録制）の学習支援プログラムです。限局性学習症、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症など子ども一人ひとりの発達特性に応じて、学びやすい方法を探りながら「楽しく勉強」をモットーに月 2 回程度活動しています。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、令和 3 年 4 月～令和 4 年 1 月までの活動となってしまいました。課題内容は学校で習った学習内容の取りこぼしを補う課題のほか、子どものニーズや興味関心に合わせて設定しています。本年度はタブレットのアプリで漢字や算数の学習をしたり、カルタで遊びながら語彙を増やす活動を取り入れたり、お買い物セットを作成してお金の計算練習などを行いました。

また、本プログラムには特別支援教育を学ぶ大学生が子どもの指導担当として参加しています。課題づくりも大学生が中心になって行っており、発達障害のある子どもたちの学習支援について実践的に学ぶ場にもなっています。

お金の計算練習用に、学生が作ったお買い物セット。お財布もあります😊

② 夏休み!!宿題おたすけプロジェクト

（R3.8.3(火)・4(水)）

毎年、夏休みの数日間を使って実施している短期集中型の学習支援プログラムです。発達特性によって学習に困難が生じている児童が対象となっており、家庭ではなかなか進められない夏休みの宿題に取り組みます。令和 3 年度は新型コロナウイルス感染症への感染対策を講じながら、期間や参加人数の規模を縮小して開催しました。

本プログラムでは教員を目指す大学生が「おたすけ隊」となって、指導やサポートを担当しています。大学生が発達障害の子どもたちへの支援方法を学ぶ場でもあるため、事前に発達障害を専門とするセンタースタッフが研修を行い、担当する児童の特徴や関わりのポイントを学んだうえで実践に挑めるよう配慮しています。

パソコンやタブレットを使った調べものもお手の物♪

1 日頭を使うので、リフレッシュタイムは欠かせません！

子どもが持ち寄る宿題は漢字や計算を含むワーク類、作文や新聞作り、リコーダーの練習など盛りだくさんです。2 日間という限られた時間の中で、それぞれおたすけ隊と一緒に集中して取り組んでいました。中には用意していた宿題が予定よりも早く終わってしまったという子どももいました。子どもにも保護者にも、「こんなにできるんだ！」と実感してもらえたのではないかと思います。全てのスケジュールをこなした最終日は、お楽しみの時間として子どもと保護者、おたすけ隊の全員でゲーム大会を開催して終了しました。

③ 鉄オタ倶楽部

発達障害のある子どもたちが自分の興味や関心をとことん追求しながら集団の中で社会的スキルを学ぶことを目的とした活動です。月 1 回定例会を開き、年度末には成果発表会を開催しています。本年度も zoom 中心の活動となりましたが、前半は本学の世良先生（技術科）にご協力いただいて 3D プリンターを用いたグッズ作成に取り組みました。オリジナルの社章を考案するところから始まり、デザインのデジタル化、色付けまで、スタッフやサポーターの力を借りながら満足度の高いグッズを作ることができました。何より、久しぶりに集合できたことが嬉しかった様子で、各所で鉄オタ活動を報告し盛り上がっていました。

お揃いのキーホルダー。好きな鉄道会社のカラーに塗るメンバーもいて、こだわりが窺えます☺

本年度の 3 月の成果発表会は、子どもとサポーターのみ大学に集まり、他の方はオンラインで参加するという形をとりました。今回は「鉄道に詳しくない人を鉄道の沼に落とす！（ハマらせる）」を目標に掲げ、おなじみの近鉄、JR、京阪の車両紹介や N ゲージを走らせている動画、撮り鉄のバーチャル日本縦断ツアー、鉄道の歴史紹介など様々な方向から鉄道の魅力を発表しました。直接参加者の方の反応は見られませんでしたが、子ども同士で他のチームの良いところを語り合ったり、参加者から感想を聞いたりして楽しみました。

【 個別相談（発達相談・教育相談）】

令和 3 年度は、3 月 15 日時点で 229 件の発達相談があり、教育相談・コンサルテーションは 31 件ありました。当センターでの発達相談および教育相談は予約制となっています。ホームページからお申し込みが可能です。

【理数教育研究センター】

優れた理数系教員の養成を目指す当センターの活動では、本学学生の教育ならびに学校現場・地域との連携のもと、令和 3 年度は新型コロナウィルス感染症の流行のため、しっかりとした予防対策をとれる事業に限り実施しました。以下、それらの一部を紹介します。

1. サマースクール イン 曽爾

8 月 21 日に県下山村部にある曽爾小中学校で「サマースクール 2021 イン 曽爾」を開催しました。今年はコロナウィルス感染拡大防止のため、例年より規模を縮小し、感染症対策を行いながら実施しました。このサマースクールは、曽爾村との包括連携協力協定に基づいて行われたものです。本学が推進する、優れた教育実践力を持つ理数科に強い教員の養成を目的とした理数教育プログラムに参加する学生や教員が、理科・数学（算数）実験を中心とした特別授業を行いました。小中学校では普段できない実験などを目の当たりにした児童・生徒は、驚きと感動を胸に授業に取り組んでいました。子供から大人まで、素晴らしい曽爾の自然環境の中で、共に思いっきり学びました。

➢ チャレンジ・サイエンス

（中学生対象の理科・数学ブース、学生が実施）

① 図形と友達になろう～feat.一筆書き～

② 身の回りのもので石鹸をつくってみよう

➢ サイエンス・ルーム

（小学生対象の理科・算数ブース、学生・教員が実施）

① 葉脈標本作り

② キュールッビプーク - 並べかえパズルの算数

講師：小川泰朗特任助教

③ 虫取り

講師：石田正樹教授、小長谷達郎准教授

サマースクールの様子は当センター・ホームページにも掲載しているのでどうぞご覧下さい。

このサマースクールは本学の特色プログラム「スーパー・サイエンス・ティーチャー（SST)」の一環です。学生は理科・数学（算数）の教材研究とともに、小学生・中学生、また学校現場の先生方と接していく中で教育現場での実践経験を積んでいきます。

2. 高校生のための素粒子サイエンスキャンプ「Belle Plus」

高エネルギー加速器研究機構（KEK）との共催で、高校生を対象とした素粒子サイエンスキャンプ「オンライン Belle Plus（ベルプリュス)」を開催しました。このキャンプは、KEK の Belle 実験で実際に行われてきた最先端の研究活動を高校生に体験してもらうことを目的として、平成 18 年度より実施しています。15 回目となる今回のキャンプは、新型コロナウィルス感染症の影響により、対面での開催は困難であるため、昨年度に引き続きオンライン形式で 8 月 8 日～10 日と 8 月 12 日に開催し、山形から沖縄まで全国から 16 名の高校生が集いました。

本センターの片岡佐知子特任准教授は、実行委員長としてキャンプの企画・運営に携わるとともに、実習の指導にあたりました。

キャンプの中核となる実習では、Belle 実験で使用されている粒子測定器や実験データなどを活用した以下の３つの課題を実施しました。

① Belle の実験データの中から粒子を探索する研究

② ワイヤーチェンバーを用いて宇宙線の降り注ぐ角度を測定する研究

③ Belle 実験で観測可能な現象の理論的研究

また、キャンプでは実習を行うだけでなく、実習結果をまとめて考察を加え、それらを発表する時間を設けています。8 月 8 日～10 日の 3 日間の実習と発表準備を経て、8 月 12 日の発表会では、それぞれの発表に対して高校生が質問を投げかけ合う場面もあり、研究者さながらの活発な議論が交わされました。 この他にも、素粒子物理学の講義やオンライン施設見学やサイエンスカフェ、交流会を実施しました。

アンケートでは「4 日間素粒子物理学に触れて理解を深めたり、研究とは何かを実感することができた」、「問題は一人で解くものではなく、協力して解くことができるものでもあると気づくことができた」、「オンライン開催で自宅にいながら素粒子物理研究の最先端を知ることができた」といった感想が述べられていました。

3. サイエンス・スクール in 五條

8 月 27 日（金）に、奈良県五條市教育委員会との連携のもと、五條東小学校を会場とした「第 5 回サイエンス・スクール in 五條」を開催しました。 この活動は、理科や数学（算数）を専門とする本学教員による様々な実験・演習や体験活動を通し、児童・生徒の理科や数学（算数）に関する興味・関心を高める事や現職教員の方々の参加によって普段の学校での実験授業の参考にしてもらい、授業力の向上を図ることを目的としています。会場の五條東小学校の教室では、子供たちの真剣なまなざしと歓声に包まれました。

開校式の後、次の 3 つの講座を開講しました。

① 見えないものを観る～霧箱で放射線を観察しよう～

講師：片岡佐知子特任准教授

② 見た目ではわからない川や湖の水質について考えよう！

講師：藤井智康教授

③ 石けんまくの力

講師：常田　琢教授

4. 河合第一中学校　大学訪問

10 月 29 日（金）に河合第一中学校 2 年生 35 名、引率教員 6 名が校外学習活動の一環として大学を訪れました。これは、理数教育研究センターの地域連携活動として実施し、大学での学びの体験を通じて将来の進路選択について考える機会を提供することを目的としています。当日は理数教育研究センターの教員 3 名が授業を行いました。

① 工夫して測ってみよう

講師：片岡佐知子特任准教授

身の回りのものを使って、「30 秒を測る」装置作りに挑戦してもらいました。最初は、何から手をつければ良いのか戸惑う様子もみられましたが、様々なアイデアを出し合い試行錯誤しながら装置作りに取り組んでいました。

② 身の回りに潜む数学

講師：舟橋友香准教授

マンホールのふたは、なぜ丸い？砂浜に手を埋めてから持ち上げると、砂はどんな模様になる？本授業では、体験を通して、学校で学んだ数学的知識と身近な現象とを結びつける学習を展開しました。

③ 天文学者のおしごと

講師：信川正順准教授

天文学者は夜になると望遠鏡をのぞいて新しい天体を探している・・・わけではありません。実は誰も見たことがない宇宙を見るため、誰も持っていない望遠鏡を天文学者が自ら作っているのです。本授業では天文・宇宙に関する仕事について紹介しました。また、大学の天文台の見学も行いました。

後日、送られてきた生徒一人一人が書いた感謝状には、「普段、私たちが学んでいる内容とは違い、数学や理科の概念が自分の中で少し変わった気がしました。実験はとても面白いと気づくこともできました」「たくさんのことを研究して、それを私たちに伝えてくれる姿がとても印象にのこりました」といった感想が綴られていました。

【自然環境教育センター】

1．新型コロナウィルスの影響およびその対応

2021 年度の新型コロナウィルスは，昨年度と同様に自然環境教育センター実習園にも大きな影響をもたらしました．年度初めには，情勢が落ち着いて公開講座や授業・実習などを通常通りできるのではないかと希望的観測を持っていましたが，そうそう状況はよくなりませんでした．確かに前期前半は，授業・実習を対面で出来るまで状況は改善していましたが，すぐにオンライン主体の授業形態へと推移してゆきました．しかしながら，対面で授業する期間が昨年度よりは長かったせいか，2021 年度の実習園利用状況は，234 日 1,664 人 （2022 年 2 月の暫定値）であり例年の半分程度でしたが，昨年（258 日 984 人）よりは多い利用状況でした．

結局のところ，2021 年度の新型コロナウィルスの影響と対応は，昨年度とほぼ同様で，授業・実習に関しては，本学の授業実施基準に従って一部実施し，公開講座に関しては，先行き不透明な状況であったので中止しました．近隣保育園幼稚園等による芋ほり等の利用に関しては，基本的には野外で 3 密を避けることを基本として実施しました．サツマイモの未収穫畝は，今年も教職員等の補助を得て収穫しました．今年度は，収穫したジャガイモと米，サツマイモの一部を学生に無償配布しました（図 1）．朝 10 時から生協食堂にて無償配布を開始しましたが，米（1kg 50 袋，2kg 50 袋）は，12 時までにすべてなくなってしまうほどの盛況ぶりでした．サツマイモは，コンテナいっぱいに 2 箱ありましたが，こちらもなくなりました．

来年こそは，新型コロナウィルスが落ち着いて通常事業ができるように祈りつつ，通常通りの授業・公開講座などを実施するものとして，作付け計画を実施してゆく予定です．

図 1．お米，サツマイモの無償配布の様子と掲示．

2．実習園の様子

実習園は設備の老朽化や獣害が深刻な状況です．2018 年度まで利用してきた講義室は現在利用を停止しているため，実習園で行う授業・実習等は青空教室で行っています．そのため，建物の建て替えや施設整備は必須事項と認識しています．2021 年度は目的積立金の予算配分を得て，老朽化で雨漏りなどがひどいガラス温室の隣に，加温可能なビニルハウス （3×5 m^2） を 1 基新設することになりました （図 2）．ガラス温室で行ってきた栽培実験や苗の育成などに役立てます．また，既存のビニルハウスが劣化して壁面や天井のビニルが破れていたので，前面のビニルを張り替えました．また，実習園で従前通りに授業が出来ない状態なので，理科 1 号棟の北にある小農場に小規模なビニルハウス （3×4 m^2） も新設しました （図 3）．実習園を利用した授業・実習・研究等に利用される予定です．

図 2. 実習園の新設ビニルハウス.

図 3. 理科棟北小農場に新設したビニルハウス.

3. 実習林の砂防堰堤工事進捗

奥吉野実習林では国土交通省による砂防堰堤工事が 2011 年以来続いており, 最後の砂防堰堤である 3 号砂防堰堤が現在工事中で, 2022 年度中に完成する見込みです(図 4). 大方の砂防工事は終了しましたので安全性は著しく向上しましたが, その他にも管理用道路などの工事が続きますので, 工事完了まではしばらくかかりそうです.

図 4. 国土交通省の砂防堰堤計画 (https://www.kkr.mlit.go.jp/kiisankei/map/3.html 2022 年 2 月 20 日確認.

工事完了に先駆けて, 今年度は施設の復旧と再開のための準備を始めました. 2021 年 6 月に学長他と復旧と再開の方針を検討したところ, 災害復旧補助金の申請をせずに建物等の復旧を最低限として野外活動が行えるように存続させる方針が検討されました. 施設の状況は 2014 年に土砂が施設に流入して以来大きな変わりはありませんが, 土砂流入の被害を受けた研修棟と宿泊棟の 2 棟について, 2021 年度中に建物の減損処理を行うことになりました. 一方, 目的積立金を元にして施設のインフラ整備を行いました. 減損処理した既存の建物の代わりにはなりませんが, 3.8×3.1 m^2 の小規模なプレハブ小屋 (図 5) と仮設トイレ, 浄水器, 給水設備, 浄化槽などを設置しました. 電気は既に通っているので, 次はテント泊をするための平地を整備するために, 施設内の土砂を搬出してゆくことが必要です. 他にも, 安全に利用できる範囲を定めること, 安全性を考慮した運用マニュアルを作成すること, 防災教育拠点として利用すること, インフラ (トイレ, 水道, 電気, ガス, テントサイト) の整備を進めること, 関連機関との連携を高めることを目標として計画の策定を進めてゆきます. これらの整備をしつつ, 来年度は少しずつ実習林を再開してゆく予定です.

図 5. プレハブ小屋（2021 年 12 月 14 日）

4. 奈良教育大学センター協働防災教育プロジェクト

本学の３つのセンター（自然環境教育センター，理数教育研究センター，保健センター）が協働して開始した“センター協働防災教育プロジェクト”も７年目を迎えます．昨年同様，コロナ禍の影響を受け，プロジェクト活動は実施できませんでした．教員免許更新講習「奈良の自然災害を知って子供を守る～防災教育入門～」(8･10 月)は，これまでに約 400 人の現職教員が履修しておりますが，今後免許更新講習の制度自体が廃止（発展的解消）される見通しであります．したがって，現職教員への防災教育普及の方法を模索する必要が出てまいりました．

本プロジェクトでは，かねてより奈良県の防災教育拠点として奥吉野実習林を教材化することを計画しておりましたが，今年度（2021)の目的積立金事業（設備関係）において,「奥吉野実習林における防災教育授業実施にかかる水回り整備等」が復活採用（一旦は棄却された）されました．実施は来年度以降にはなりますが，本学の教員養成ばかりではなく，教員研修をも視野に入れた実習林の教材化を計画しています．

一方，奈良教育大学防災訓練プロジェクトチーム”（座長：笠次良爾 教授）は，コロナ禍に対応したオンデマンド全学防災研修会を，令和 3 年 12 月 10 日(金)～令和 4 年 1 月 31 日(月)に実施しました．今年度で 2 回目となる防災研修会では， 冒頭での学長メッセージに続き，以下のような流れでプログラムが実施されました．

【プログラム内容】

1. 奈良教育大学を地形から見る
2. 大規模地震における初期行動
3. 安否確認システムの登録方法
4. 応急手当と心肺蘇生法（AED の使い方）
5. 消火栓の使用方法
6. 応急手当の理解を深めよう（概要編）重要性・法的責任について
7. 応急手当の理解を深めよう（実践編）ケガ人へのアプローチを学ぼう
8. 災害時の対応について
9. 防災教育の教材の紹介
10. 安全企画委員会（学生消防団）活動紹介

また，本学学生の卒業研究との連動により，昨年度よりも 4 項目もの内容が追加されました．確認テストによる防災知識の定着に加え，アンケート調査を実施することで改善の模索が計画されており，昨年度にまして良い防災研修会が実施できたようでありました．

センター協働防災プロジェクト HP URL:
http://mail2.nara-edu.ac.jp/%7Emasaki/Center_Cooperative_Education_Project_for_Disaster_Prevention/EPDP_Home.html

◆◇◆

図書館

https://libwww.nara-edu.ac.jp/drupal/

次世代教員養成センター

https://jisedai.nara-edu.ac.jp/

国際交流留学センター

http://cies.nara-edu.ac.jp/

特別支援教育研究センター

https://cp-support2.nara-edu.ac.jp/hp/

理数教育研究センター

http://nesm.nara-edu.ac.jp/

自然環境教育センター

https://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/

◆◇◆

奈 良 教 育 大 学

〒630 － 8528　奈良市高畑町

奈良教育大学教育研究支援課

TEL：0742 – 27 - 9303

E-mail: kyoken-shienka@nara-edu.ac.jp